

W妹 ダブイモ ヴィジョナリー

DABUIMO VISIONARY

紙の体験版



二ノ宮 ありす
(にのみや ありす)
編

☆PCから飛び出してきたエロゲー内の妹☆

に の み や

二ノ宮 ありす

- 身長：148cm
- スリーサイズ：B93(G) / W58 / H84

主人公がDLしたエロゲーのヒロイン。
妹キャラである為、
主人公のことを「お兄ちゃん」と呼ぶ。

性格は幼く無邪気で、
お兄ちゃん(=主人公)のことが大好き。

P Cから飛び出してきた際、
その場に居た主人公の実妹・亜里紗と
何故か融合してしまう。

結果として一つの身体に二つの心が
宿ることになり、クシャミをきっかけに
二人の心と身体が入れ替わる。
(ありすの意識が表に出てくると、
身体もありすの姿へとチェンジする)

その融合状態を元へ戻すには、
ありすと交流を深め(Hして)、
彼女を“攻略”する必要があるというが…？

背は低めで童顔口リ巨乳。金髪碧眼。



『W妹ヴィジヨナリー』紙の体験版
二ノ宮 ありす 編

「さつきから曇り出してきたな…ひと雨来そうだ」

空はどんよりと灰色に覆われ、雨の匂いと気配が感じられる。

まだ帰ってきてない妹のことがちよつと心配になるが、亜里紗は常に折り畳み傘を携帯しているので、大丈夫だろう。

「それより亜里紗が帰ってくる前に、さつき相羽にオススメされたエロゲを買ってしまおう」

ネット上で手続きしてDLするだけだから、妹が家にいようといまいとあまり関係ないけど、まあ気持ちの問題である。

そこで早速PCから販売サイトにアクセスして、購入手続きをすることに。

「お、これだな——へえ、サイトのトップに出てるじゃん」

『不思議の国のいもうと』というエロゲーは、販売サイトのトップを飾っていた。どうやら相羽の言う通り、今話題作らしい。

「それじゃあ、ポチッとなつと」

マウスをクリックして、ブラウザ上の購入ボタンを押す。

それから購入手続きを適当に済ませ、『不思議の国のいもうと』のDLを開始した。

「おいおい、雷まで鳴り出したぞ…大丈夫か？」

DL待ちの間に、空模様がいよいよ本格的に怪しくなってきた。

頼むからDL中に停電とか、マジ勘弁してくれよ？

『ただいまー』

「っ？ 今の声…亜里紗か！」

そこへ階下から玄関のドアが開く音がして、続いて妹の声が聞こえてきた。

まずいな…今俺が妹モノのエロゲをDLしてるのがバレるのは、色々と困る。

妹はわりと遠慮なく俺の部屋に入ってくるし、チャットと違ってDLは今中断するわけにはいかなかった。

（俺の部屋には鍵もないし…今は亜里紗が部屋に入ってこないことを祈るしかないっ）

それから程なくして、妹が階段を登る音が聞こえてくる。

パタ、パタ、パタ、パタ：

そして2階に到着し、廊下を歩く音が近づいてきて：

しかしその足音は俺の部屋の手前で途切れて、隣の部屋のドアが開く音がする。どうやら妹は真っ直ぐ自分の部屋に入ったようだ。

「ふう：良かった、俺の部屋には乗り込んでこなかったな」

よく考えたら理由もなく俺の部屋を訪ねるような奴じゃないしちよつと無駄に警戒しすぎたかもしれない。

とにかくこれで一安心――

ガラガラガッシャー――ンツ!!!

「うわあ!？　い、今の、カミナリかつ？」

突然、白い閃光が辺りを照らしたかと思うと、大気を揺るがすほどの轟音が鳴り響いた。

どうやら危惧していた通り、雷が落ちたらしい。それも結構近くで。

「んっ…部屋の明かりが消えてる!？」

しまった、停電か！

部屋の明かりが消えたということは、当然エロゲをDL中のPCも…

「…って、あれ？　なんか変だぞ」

しかし慌ててPCの方を見ると、何故かそのディスプレイは消えていなかった。

俺のPCは停電対策をしてないし、当然UPSなどの予備電源もないのに、何故…？

「つーか、この画面もおかしくないか？　もしかして、バグってる？」

そう、まるで一昔前のTVみたいに、画面には砂嵐が走って――

――ニョキッ

「!？」

すると、画面に更なる変化が訪れた。

PCのディスプレイから、まるで3D映画のようにウサギらしきものが飛び出してる……？

（ウサキつつーか、よく見たらウサギのぬいぐるみかコレ？）

いや、そんなことはこの際どうでもいい。

問題はなんでそれが、PCの画面から飛び出そうとしてるのかってことだ。

ガチャッ

「お、お兄い、停電が！」

「亜里紗っ？」

その時突然部屋のドアが開いて、制服姿のままの妹が飛び込んできた。

どうやら着替える前に停電になって、それで慌てて俺の部屋までやって来たらしい。

「ええ？ お兄いの部屋、なんでパソコンが点いて…」

「…つていうか、なんか出てる!? 何よそれえっ」

「俺にもわからん！」

妹もすぐにPC画面の異常に気付くが、俺にその原因がわかる筈がなかった。

「ね、ねえお兄い…そのウサギ、なんかどんどん飛び出してきてない？」

「あ、やつぱり…？ 実は俺もそんな気がしてた」

亜里紗の言う通り、PCの画面からは、例のウサギが身を乗り出すように浮かび上がって――



「亜里紗っ!？」

そしてその女の子は、狙いを定めたかのように妹の方へ向かって飛び掛る！

「いやぁー………っ!？」

「亜里紗ぁー!!！」

当然俺は妹を守ろうとしたけど、とっさのことで間に合わず…

妹とその女の子が、衝突——したかのように見えた。

同時に一瞬、視界が真っ白になるほどの光が覆う。

「亜里紗、大丈夫か!？ 亜里紗!」

その光で目の眩んだ俺は、妹のいた方に向かって声をかける。

しかし妹からの返事はなく、俺は焦りながらも、視界がゆっくりと回復していくのを待つしかなかった。

「うう…ようやく目が見えてきた」

数秒後、ようやく視界が回復し、再び薄暗い部屋が目映る。

「っ？ 今度は部屋の明かりが――」

と思ったら、それとほぼ同時に部屋の電気も点いた。
停電が治まったのか…？

「そうだ、亜里紗は！？ 亜里紗っ」

妹の姿を探して、明るさを取り戻した室内を見渡す俺。

「亜里紗っ――じゃ、ない…？」

すると妹が立っていた筈の場所に、別の女の子が横たわっていた。

金髪のショートヘアに、エプロンドレス…
実にコケティッシュなロリータファッション。

どれも日常感に乏しい姿をした、見知らぬ女の子だった。

（いや、見知らぬ女の子じゃない——）

この娘はついさっきPCの画面から飛び出てきた、あの女の子だった。

「じゃあ、亜里紗は？　亜里紗はどこいったんだ？」

しかし肝心の妹の姿が見えない。

ついさっきまで確かにここに居た筈なのに、どこへ行ってしまったんだ？

「んう…？」

「あつ——」

などと思っていると、例の女の子が目を覚ましてぼんやりとこちらを見る。

この状況で無視するわけにもいかず、何て声をかければいいか戸惑いつつ俺も口を開く。

「き、キミ…大丈夫？」

「ふああ……あつ」

俺が声をかけると、女の子はあくびを一つしてから、ようやく俺の存在に気付いたようで――

「あーっ、お兄ちゃん！」

「へっ？」

見慣れぬ女の子からの思わぬ言葉に、俺はつい間拔けな声を漏らした。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんっ」

「うおおっ、ちよ、ちよっとキミ!？」

そしてその娘はピョンと飛び起きたかと思うと、遠慮なくがばっと俺に抱きついてきた。

「うふふっ、お兄ちゃんっ」

寝ぼけてるのか、俺を『お兄ちゃん』と呼び、随分と親密なハグをかましてくれる女のこ。

（うわ、すげえいい匂い…！）

ミルクのような甘い香りと、妙に柔らかい感触がして、見るとその娘はすげー胸が大きかった。背は妹よりも低く、かなり幼い顔立ちをしてるのに、妹より遥かに巨乳である。その感触は一言で言うと、

おっぱいぷるんっぷるん！

…って感じであつた。

（つて、力強くおっぱいの感想を語ってる場合じゃない！）

俺はそのおっぱいに溺れてしまう前に、抱きついてくる女の子を引き剥がす。

「ちよ、ちよっと待った！　まずは落ち着いて、ね？」

「やあん、おにいちやゝゝゝんっ」

全力でじゃれてくる犬を宥めるようにして、女の子と適切な距離を取る俺。

姿の见えない妹のことも気になるが、今はとりあえず、目の前のこの娘のことから状況を把握するべきだろう。

「それじゃまず…キミの名前は？」

「ありすだよ。二ノ宮ありす」

「二ノ宮…ありす？」

『二ノ宮』は言わずと知れた、俺の苗字だった。

（俺と同じ苗字…？ それに俺のこと、さっきから『お兄ちゃん』って——）

俺はそんな彼女に違和感を覚えつつも、とりあえず質問を続けることにする。

「それでキミ、どこから来たの？」

「うんとねー、あそこっ」

『ありす』と名乗った彼女は、俺の問いに無邪気な様子である方向を指差した。

「え？ 『あそこ』 って…」

彼女が指差した先には、PCのデイスプレイがあった。

今も画面には砂嵐のようなノイズが走っている。

確かにさつきは、この子が飛び出してきたように見えたけど――

（いやいや、そんなバカな！）

さつき見た光景は、きつと目の錯覚か何か…だと思う。

でもさつき飛び出してきた（ように見えた）女の子と、目の前の彼女は同一人物にしか思えなかった。

（待てよ、この娘の顔って…まさか!?)

そこで俺はようやく気付いた。

目の前の彼女が、俺がさつきまでDLしていたエロゲ、『不思議の国のいもうと』のヒロインそっくりであることに。

そしてさつき彼女が名乗った『ありす』という名前も、そのエロゲのヒロインの名前と同じだ

ったのだ。

「けどそれじゃあ、何で苗字が俺と同じなんだよっ？」
「？」

思わずそう口にすると、不思議そうに小首を傾げる彼女。
どうも俺の問いかけの意味を理解していない様子。
しかし彼女以外に説明できる者など誰も――

「そいつはワイが説明したるわ」

「!? えっ、なにそれ？」

『それ』とか言うなや。失礼なやつちやな」

すると突然、右手にパペットをはめて話し始める彼女。
なかなか芸達者だったが、急に腹話術をされても反応に困るわけで。

「えーと、その人形は何なのかな？」

「人形ちやう！　ワイは白兔のキャロルや」

彼女——というかそのパペットは、何故か（エセ）関西弁でそう語る。

そういや最初に画面から飛び出してきたのも、このパペットだったことをふと思い出した。

「あのね？ そんな人形使わなくても、普通に喋ってくれればいいから」

「違うよー。今しゃべってるのはキャロルで、ありすじゃないよ？」

「せや。ワイはありすが操ってるのとちやうで！ ワイはワイの意思で喋つとるっちゅーねん」
「いや、そんなこと言われても…」

どう見ても目の前の娘が、パペットで器用に腹話術してるようにしか見えなかった。

「頭の固いやつちやなあ。ナリはこんなやけど、ワイにも独立した人格っちゅーもんがあんねんで？」

「あのね、キャロルは物知りでえ、ありすの知らないこともいっぱい知ってるんだよ」

「そうそう。見ての通り、ありすはちよーつとアホの子やろ？せやからワイが色々教えたってんねん」

「ありす、アホの子じゃないよお。 おっぱいだっておっきいし、もう大人なんだもん」

「乳デカイだけやないかい、このロリ巨乳が！ おっぱいに頭の栄養も全部取られとんのちゃ

うか？」

「そんなことないもん！　ありす、こう見えて結構かしこいんだからっ」

「その台詞が既にかしこないけどな…　じゃあ試しに、賢そうなこと言うてみい」

「えっとねえ…シュレディンガーの猫さん！」

「うわー、賢そう！　でもお前絶対意味わかってへんやろっ」

「シュレディンガーの猫さんってオスかな？　メスかな？　でも確かめてみるまでは、オスでもありメスでもある…」

「あれえ、当たらずしも遠からずっぽい!?」

「……………」

なんか美少女がパペットと漫才しだしたんですけど…

俺には未だにワケがわからなかったが、ここで引つかかっていると、このまま延々と漫才を続けそうだ。

「わかった、わかったから！　じゃあキャロル、お前でもいいから俺の質問に答えてくれ」

「しゃーないなあゝ。　ま、このワイに何でも訊いたっていてくれや」

その偉そうな態度が若干腹立つが、とりあえずこのパペットの人格を認める体で話を続ける。

「まず、キミ達はどこから来たんだ？」

「なんや、それさつきありすが言うてたやんけ」

「いや、だからそれじゃわかんないから、こうして改めて訊いてるんだよ」

「またまた。あんさんもホンマは気付いてんのやろ？」

「気付いてって…なにを」

「せやから、ワイらがエロゲのキャラやっちゅーことにや」

「！」

パペットにそう指摘され、俺は言葉に詰まった。

確かにこいつの言う通り、内心ではそうじゃないかと思っていた。

だって彼女はPCの画面から出てきたし、俺がDL中だったエロゲのヒロインそっくりだし…でもそんなことはあり得ないと、頭が、理性が否定していたのだ。

「あんさんもその目で見たやろ。ワイらがそのパソの画面から飛び出すところを」
「ああ、確かに見たさ！でもそんなのあり得ないだろっ？」

しかしそんな俺をあざ笑うように、パペットは追い討ちをかけてくる。

それに対し俺は『常識外れだから』という、思考停止した答えを返すしかなかった。

「そもそも、どうしてそんなことが起きたんだよっ？」

「それはワイにも確かなことはわからんけど：多分あのカミナリのせいやろ」

「カミナリって：まさか、さっきの落雷のことか？」

「せや。あんさんはワイらの出てるエロゲをDLしとった：で、その途中でカミナリが落ちた」

「恐らくその時のショックでワイとありすが実体化して、ゲームの中から現実に飛び出してきたんやろな」

「んなアホな！ あり得へんっ」

あまりのことについて関西弁がうつってしまいがちながら、パペットの言葉を否定する俺。

しかしその人形は口をパクパクさせながら、しれっとこう言っただけのだった。

「1・21ジゴワットでタイムスリップできるくらいやもん、エロゲからキャラが飛び出してきたもおかしいやろ？」

「いや、おかしいだろドク！ デ○リアンでもそんなの不可能だつーのっ」
「誰がドクやねん！ ワイはキャロルやゆーとるやろ」

わかつてる。これはもう、理屈がどうかというレベルじゃないってことを。

それでも頭が事実を受け入れられなくて、俺はパペットからその持ち主（？）たる少女へと視線を移す。

「なあ、本当にそうなのか？ キミはエロゲから出てきたヒロインだつて？」

「んゝゝあります、そういうのはよくわかんないの」

「ただわかるのは、ありすがお兄ちゃんの『妹』ってことだけだよ」

『妹』？ キミが、俺のゝ妹？」

「うんっ。だつてお兄ちゃんはお兄ちゃんだつて、ありすすぐにわかったもん」

ニコニコと嬉しそうに、何の疑問も持たずにそう言い切る彼女。

しかし俺にしてみれば、彼女の『妹』宣言に戸惑うばかりだった。

「ちよ、ちょっと待ってくれよ。キミが俺の妹って、なんでそうなるんだ？」
「だつてお兄ちゃんは、ありすのお兄ちゃんだから」

「えっ、何その卵か先かニワトリが先か理論は」

お兄ちゃんが先か妹が先か、それが問題だ…

いや生まれた順は兄が先に決まってるんだけどさ。

「あんな、ありすは主人公——つまりプレイヤーであるあんさんの、『妹』っちゅー設定な
んや」

「せやからありすにとつては、あんさんが『お兄ちゃん』っちゅーわけやな」

「設定って…いや、そりやエロゲの中ではそうなんだろうけどさ」

「ちゅーかそんなことも知らんと、ワイらの出てるエロゲをDLしたわけやないやろ？」

「まあ、それは一応わかつてる…と、思う」

でもまさかそのエロゲのキャラが、現実には飛び出してくると思っただけで。

俺がDLしていた『不思議の国のいもうと』というエロゲは、タイトル通り妹キャラがメインヒロインとなっている。

その妹キャラが目の中の彼女だしたら、プレイヤーである俺は、彼女にとって『お兄ちゃん』になると？

（しかしそう言われても、俺にはこんなロリ巨乳な妹、今までいなかったわけで）

俺の妹といえば最近ツンツンばかりでデレを見せてくれない、
どちらかというと貧乳な妹だけ――

「――って、そうだ！ 亜里紗は…俺の妹はどこにいった？」

そこでようやく、貧乳の方の妹の存在を思い出す俺。

いや、忘れてたわけじゃないぞ？ ただ異常事態が重なって、状況の理解が追いつかなかった
だけで。

「？ お兄ちゃんの妹はありすだよ？」

「そうじゃなくて、本当の妹のことだよ！」

「あうっ。お、お兄ちゃんが怒ったあ…」

「あっ――」

俺がつい怒鳴り声を上げると、ありすと名乗った少女はじわあゝと目に涙を浮かべ…

「ありすは、お兄ちゃんの妹じゃダメなの…?」

「あ、いや、そういう意味じゃなくて…」

「な〜かした、な〜かした♪ せ〜んせ〜にい、ゆーたーろー♪」

「お前は煽るな! ちったあフオローしろよっ」

などとツツコミつつ、俺は二人…

というか少女と人形の様子を観察する。

少女は泣いてるのにパペットの方は普通に喋っていて、まるで本当にパペットが独立した人格みたいだ。

いや、彼女達が本当にエロゲのキャラなら。

本人達の言う通り、そういう『設定』なのかもしれない――

(――って、だからそんなワケないだろ!)

早くも乗せられつつある自分の思考を否定しつつ、とにかく今は妹を探すのが先決だと思い直した。

「あうう、お兄ちゃんに嫌われたあ…ぐす、ひつく」

「き、嫌ってない、嫌ってないぞー？ えっと、ありすちゃん？」

『『ありす』だもん… ちゃん付けなんて、よその子みたいに呼んじゃヤダ』

「あーもう、わかったよ！ ありすは俺の妹、これでOK？」

「本当に…？ ありすのお兄ちゃんで行ってくれる？」

「ああ、キミが——ありすがそう望むなら、俺はお前のお兄ちゃんだ」

「…えへへっ。やっぱりお兄ちゃんはお兄ちゃんだあ」

そうしてなんとか彼女…ありすを宥めると、新たな妹は嬉しそうにはにかんだ。

うう、可愛い…何となく亜里紗の小さい頃を思い出させるな。

実際の歳は亜里紗と同じくらいだろうけど、精神年齢はかなり低いように思える。

まあ彼女はエロゲのヒロインらしいから、そういう『設定』と言ってしまえばそれまでだが。

（いや、もちろんそんな話を信じてるわけじゃないけどね？）

その辺のことはとりあえず置いておくとして、今は（リアルの）妹の所在を明らかにしないと。

「それでさ、ありす」

「なあに、お兄ちゃん？」

「キミがここに出てきた時、俺の他にもう一人、女の子がいただろ？　その子がどこにいったか知らないか？」

「女の子…？　お兄ちゃんとキャロル以外に、誰かいたっけ？」

「いたんだよ。その子が急にいなくなったから、俺は探してるんだ」

「うーん…ありす、よくわかんない」

ありすはハテナ顔で小首を傾げた。

ダメか…その答えにウソはない様子で、落胆する俺。

しかし他に話を聞ける相手といえは…

「キャロルは何かわかる？」

「うーん、もしかしたら…いやまさかな…」

「つて、何か知ってるのかっ？」

思わせぶりの発言をするパペットに、俺は慌てて詰め寄る。

亜里紗の所在について少しでもわかるなら、この際細かいツツコミはどうでもいい…！

「やんつ。お兄ちゃん、お顔近い… スリスリ」

「ってコラ、頬をスリスリしてくるなって！」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん スリスリ」

人の話を聞かず、もちもちしたほっぺを擦り付けてくるありす。

その感触はくすぐったくも心地よくて、しかしそれ以上に恥ずかしかった。

やばい、顔が熱くなる…！

っーか今はこんなことしてる場合じゃないっ。

「頼むから、ちよつと離れてくれって！」

「あん、お兄ちゃん——ふぁっ」

甘い誘惑を断ち切って、ありすから顔を離そうとする俺。

その時俺の前髪が鼻先を掠めたらしく、ありすは鼻をムズムズとさせた。

「はっ、はぁっ——」

「——はつくちんっ！」

「!？」

そしてありますが可愛くクシヤミした瞬間、それは起こった。

一瞬、ありすの身体が発光したかと思うと、俺の見てる前でその姿が様変わりする。

いや、様変わりというか……ありすの姿は、いつの間にか我が妹のものと入れ替わっていた。

俺はさつきから、夢でも見ているのだろうか——？

「あ、亜里紗……？」

「んう……？ あれ、私何やって……？」

ありすから亜里紗への変化を目の当たりにして、呆然としながら妹の名を呼ぶ俺。

そして当の亜里紗はというと、こちらも状況を理解してないのかぼんやり周囲を見渡して……

「つて、キャー!!？ 近い近い近いっ」

俺がすぐ間近に居ることに気付き、焦って突き飛ばしてくる亜里紗。

ひどい扱いだったが、それが逆にらしくて俺はむしろ安心してしまった。

「な、何してるのよ変態！ バカあつ」

「ち、違うぞ、それは誤解だ！」

つーか俺にも、何が起こってるのかわからないのだ。

亜里紗が戻ってきたのはいいが、今度はありす（達？）がどこかへ行ってしまった。

つーか俺の見たままを話すなら、

ありす自身が亜里紗にチェンジしたように見えただけ……？

「てゆーか私、何してたんだっけ？ 確か落雷があつて、停電があつて、それで……」

どうやら亜里紗も状況をよくわかってない様子で、俺はそんな妹をまじまじと見つめる。

さつきまで亜里紗はいなかった。

代わりにいたのがあるすだ。

そしてそのありすがクシヤミしたかと思ったら、ありすが光つて入れ替わるように亜里紗が現

れて――

（一体どうなってんだ？　もう手品とか幻とかってレベルじゃねーぞ！）
などと思いながら、亜里紗の姿をじっと見ていると：

「：ちよつと、何ジロジロ見てるのよ」

「え？　いや、それは：」

「妹を視姦しないで、この変態シスコンお兄い」

「するか！　あと変態でもシスコンでもないっ」

まあシスコンに関しては、正直自分でも否定しきれないけどな。

「まあいいわ。停電も直ったみたいだし、着替えてご飯の準備してくる」

「そ、そうか。頼むわ」

俺がそう生返事してるうちに、亜里紗はとつとと部屋から出て行った。
そして後に一人残された俺は、改めて先ほどの事態について思い返す。

「俺、白昼夢でも見てたのかなあ…」

さっきのは一体なんだったのか？いくら考えても頭がこんがらがるばかりだった。

「そうだ、P Cの方をチェックしてみるか」

結局D L中のゲームがどうなったのかも、まだ確認してないしな。

「って、あれ？ 何も映ってないぞ」

さっきまでは砂嵐が走っていたP Cの画面も、今や真っ黒のまま完全に沈黙していた。試しにマウスやキーボードを操作しても、ウンともスンとも言わない。

さらには電源ボタンを押し直しても、反応なしだった。

「マジか…完全にイカれてやがる」

どうやらさっきの落雷のせいでP Cが壊れたらしい。

ガツクリとうなだれる俺。

PCは修理に出すなり買い換えるなりしないと…

今日はエロゲも買ったし（DL途中でPCが壊れたけど）PCの費用もいくらかかるかわからないし、もう散々だった。

それからしばらくPCをチェックしてみたが、やっぱり壊れてるみたいで一切反応しなかった。俺もそれほどPCに詳しいわけじゃないので、自力で直すのは不可能そうだ…

『お兄いー、ご飯できたよー』

「おつ、もうこんな時間か… やっぱ俺には手に負えないな、こりや」

俺はPCの修理を諦めてると、とりあえず夕飯を食べるべく一階のリビングへ向かった。

「おつ、今夜は豚のしょうが焼きか。美味そうだ」

「ほら、さっさと座ってよ。ご飯が冷めちゃうでしょ」

「へいへい」

で、一階に下りて妹と共に食卓に付く。

今日のおかずは豚肉のしょうが焼き。

キャベツの千切りがたっぷり添えてあつて、俺の好物だった。

「それじゃ、いただきますつと」

「いただきます」

例によって二人で行儀よく手を合わせてから、箸をつける。

口を開けば俺に対する暴言ばかりの妹も、この時ばかりはどこか幼い感じがしてちよつと可愛い。

「……………」

そして夕飯を食べながら、俺はまた妹の方をチラチラと盗み見る。

さっきのあの娘…ありすは一体なんだったんだろうか？

あの時ありすがクシャミした後、ありすから亜里紗へと“変身”したように見えただけ――

「——ちよつと、また視姦？ やめてよね、マジで」

「女子が『視姦』とか言うな！ あと視姦してねーしっ」

俺の視線に気付いた妹がジト目で睨んできて、誤魔化すようにツツコミを入れる俺。どうやら妹にも、これといった自覚症状はない様子。

そもそもあのありすという少女の存在すら、俺の見た幻である可能性の方が高い気がする…

「んっ——この豚肉、ちよつと味付け薄かった？」

「そうか？ 俺はコレくらいが好きだけどな」

「ふーん、ならいいけど」

基本的には薄味が好きな俺である。

亜里紗は濃い目の味付けの方が好きみたいだが、普段の料理は全体的に薄味にしてくれてる気がする。

その分、亜里紗は後から調味料を足すことが多いけど…

「ねえ、ちよつとそこのコショウ取ってよ」

ほら来た。それをある程度予期していた俺は、返事をする前にコシヨウの瓶に手をかけた。

「ほらよ。落すなよ」

「ん。あんがと」

コシヨウを差し出すと、素っ気無く例を言って受け取る亜里紗。

で、妹はそのコシヨウを、豚肉のしょうが焼きにかけようとするが：

「あれ？ 開かない：んんんんん」

どうもコシヨウのフタが固くて開かないらしい。

そういや前に俺が使った時、フタをきつく閉めすぎたかも――

「――痛っ」

「おいおい、どうした？」

などと思っていると、亜里紗はコシヨウのフタから手を離して顔をしかめていた。

「亜里紗、お前指怪我してるじゃないか」

「あっ…ん、まあね」

見ると妹は左手の指に切り傷があつて、その怪我のせいで力が入らないらしい。

「その指、どうしたんだ？」

「ちよつとね…料理の時に包丁で切っただけ」

「そうなのか。お前にしちや珍しいな」

妹が料理するようになった最初の頃はともかく、料理の腕が上がった最近では滅多にそんなことなかったのに。

「気をつけろよ？ 時間がない時は、たまには店屋物とか頼んでもいいんだからな」

「うるさいわね。ちよつとミスっただけでしょ？ それとも私の手料理より、店屋物の方がいいの？」

「何言ってるんだ。 お前の手料理の方がいいに決まってるだろ」

「そ、そう…だったら余計な心配しなくていいから」

妹は照れ隠しのようにふて腐れてみせるが、兄としては心配しないわけにはいかなかった。

「ちゃんと薬塗って手当てしろよ。なんなら俺がやってやろうか？」

「今はご飯食べてるからいいわよ……食べ終わった後で自分で手当てするから」

「ま、お前がそう言うなら」

妹にそう言われて、大人しく引き下がる俺。

他に俺に出来ることといえは……

「じゃあ代わりに、それ貸してみろよ。開けてやるから」

「……わかったわよ。じゃあお願い」

妹から手渡され、俺の手元に戻ってくるコシヨウ瓶。

そしてここは兄の威厳を見せようと、華麗にコシヨウのフタを開けようとするが――

「――ふぬぬぬうぬぬぬぬぬつ。やべえ、これムチャムチャ固いじゃねーか」

なんだこれ。接着剤で固めてあるのかってレベルである。

するとフタが開いた瞬間、コシヨウが一度に大量に出てしまい、食卓の上に舞い上がる。

「やべえ、ミスった…は、は、ハックシヨン！」

そのコシヨウが鼻に入って、盛大にクシヤミをする俺。
コシヨウでクシヤミなんてベタすぎる。漫画か！

「ふあっ——は、は、はあっ…」

そして妹にもコシヨウがかかったらしく、むずむずと鼻を鳴らして——

「——つくちゅん！」

「…ふえ？」

「っ？ ええ~~~~~~~~?!」

すると可愛いクシヤミの直後、妹の姿が発光して…
次の瞬間には、金髪碧眼の美少女へと変化していた。

「あ、お兄ちゃんだー！　ぎゅうううううう」

「うわっ？　ちよ、ちよつとちよつと待ったあ！」

ありすのの幼い顔立ちに似合わぬ巨乳を胸板に押し付けられ、ドギマギしてしまう。
い、いや、それどころじゃない！

また亜里紗が消えて、代わりにありすが現れたぞっ？

「お兄ちゃん、お兄ちゃん♪」

「いや、『お兄ちゃん♪』じゃなくてさ！　キミ、今どこから現れたのっ？」

「ふえ？　わかんない：気付いたらここに居たの」

「気付いたらって：またそれか」

そこで俺は、ありすが現れた時のことを思い返してみる。

さつきは亜里紗がクシャミした瞬間、ありすと姿が入れ替わった。

それにありすが亜里紗と入れ替わった時も、亜里紗がクシャミした瞬間だった。
更には一番最初にありすが現れた時も、亜里紗はクシャミをして――

「——ええ？ ま、まさか…」

「せや、多分あんさんの思ってる通りやで」

「キャロル？ もしかして、お前も気付いて…」

「まあな。さっきまではまだ確信がなかったけど… こうして何度か入れ替わりを経験して、確信したわ」

ありすの右手のペットが、口をパクパクさせて喋り出す。

その表情は円らかな瞳のまま変わらないが、気のせいかな彼なりに頭を悩ませているように感じられた。

「どうもあんさんの妹と、ワイら…ありすは同化して、身体を共有しているみたいやねん」

「同化？ 身体を、共有…」

「んで、なんでか知らんけどクシャミをきっかけにして、お互いの心と姿が入れ替わるらしいな」

「ああ…理屈はわからないけど、そうとしか思えない」

とても信じられないことだけど、こう目の前で何度も見せられては、それを認めざるを得なかった。

「でも、何でクシャミ？　そもそもなんで亜里紗とありすはその、同化？したんだよ」

「まあ恐らく、アレやろ。落雷でワイらが実体化した時、途中でP Cが壊れてバグったんやな」

「それで中途半端に実体化した結果、たまたま近くにいたあんさんの妹の身体に同化したんちやうかな」

「んなアホな…」

「ついでに言うと、クシャミで入れ替わる理由は、クシャミの振動により肉体の分子配列が入れ替わって…」

「いやいやいや、待て待て待て」

調子に乗って意味不明な説明を始めるパペットに、ストップをかける俺。

そんなS F的な考証はどうでもいい。

問題は現実として、クシャミ一つで俺の妹が入れ替わってしまうという事実である。

「んゝゝゝ ???　ありす、むつかしい話はわかんないよお」

そして今、目の前には亜里紗の代わりに、しきりに小首を傾げるありすの姿が。

D Lする前に見たパッケージ画像に映っていた、金髪碧眼のロリ巨乳ヒロイン…

彼女はまさにそのままの姿をしているのだ。

（つてことはやっぱり、ありすはエロゲから飛び出してきたキャラなのか…？）

自分の中の常識が揺らぐのを感じつつ、まじまじとありすを見ています——

「ま、いいや。ありすはお兄ちゃんがいれば、それでいいんだもん♪」

「あつ、コラっ？ だからスリスリするなって！」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。ふああ、こうしてるとお兄ちゃんの匂いがするう」

あつさり考えるのを放棄して、思い出したかのように頬擦りしてくるありす。

いや、頬擦りっていうか、もはや全身を擦り付けてきてるんですけど!?

（うわあ、身体やわらせ…！ 女の子ってなんでこんな柔らかいの？）

こうしているとありすは亜里紗より背が低く、その代わり胸が大きいことがよくわかる。
この身体を、どちらかというとスレンダーな亜里紗と共有してるなんて、体型からは全く想像が付かなかった。

「んふふっ、やっぱりお兄ちゃんの抱き心地はサイコーだよお。
スリスリ、ぎゅううううっ」

（フオオオツ、俺も抱かれ心地サイコーっす！）

そうしてるうちに俺もありすの感触に反応して、ついつい勃起してしまう。

いや、これは不可抗力なんや…

こんな勃起せざるを得ないんや…

「あーっ、お兄ちゃんのおち○ぽおつきくなってるう」

「おほお!？」

更に目ざとく俺の勃起に気付いたありますが、ズボンの上から股間を握ってきた！

「そ、そんなところ触っちゃダメだって！」

「えへへ。ありす、こういう時どうすればいいか知ってるよ？」

「コラッ、ズボンのチャックを下ろすな！ やばいやばい、それ以上は—— うっ」
「はーいお兄ちゃん、脱ぎ脱ぎしましょうね？」

無邪気に、かつ無遠慮に、まるで幼子の服を脱がせる時のように、テントを張ったズボンのチャックに手をかけるあります。

彼女は どう見ても腕力があるようには見えない。
体格だって圧倒的に俺の方が有利だ。

にもかかわらず、俺は抵抗することができなかった。

（いかんイカンっ。　されるがままになってどーするよ、俺!?!）

そう、彼女は幼く見えてもエロゲのヒロインなのだ。

つまりこういうことはお手の物なわけで。

そして俺の男としての本能が、彼女の行為を突っぱねることを是としない。
これもありすのエロゲヒロインとしての魔力か、それとも俺がスケベ根性丸出しなだけか——

（だ、誰かこの状況を止めてくれえ！）

思わず周りに助けを求めようとするが、当然今は俺とありす以外は誰もいない。
更にありすの右手に付いてたパペットも、いつの間にか外れてどこかにいつてるし…！

結局俺は一切の抵抗をせず、ありすにされるがままの道を選ぶ他なかった。



「ほらお兄ちゃん、これで苦しくないでしょ？」

「うう、くあああ…！」

そのままありすはごく自然な手つきで、俺のズボンとトランクスを下ろしてしまった。それからストンとその場にしゃがみ込と、俺の勃起したペニスをそつと握り締める。

「うわあ、お兄ちゃんのおち○ぽ、おっきいね」

血管が浮き出るほど怒張した竿の部分に手を添え、無邪気な感想を漏らすありす。男性器に対して一切の抵抗がなさそうなのは幼さ故か、それとも彼女がエロゲヒロインだからか…？

「こ、こんなことはしちゃいけないつ。今すぐ止めるんだ！」

ここまで無抵抗だったくせに、我ながら説得力のないことを言う。

無論そんな虚しい台詞では、ありすの行動を制止することなど出来なかった。

「でもお兄ちゃん、おち○ぽ辛いんでしょ？　こんなに赤く腫れちゃって…さすさす」

「おほおっ？ ソコさすさすしちやらめえ！」

労わるように竿を手でさするありすに、情けなくもビクンビクンと背を反らす俺。

ほっそりとしてしなやかな指先がなぞる感触は、まるできめ細やかな絹のような肌触りだった。

「おち○ぽみるくビュッビュッてしないと、コレ元に戻らないんでしょ？ ありす知ってるんだから」

「あ、やっぱそういう知識はあるんだ…」

「だからあ、ありすがお兄ちゃんのおち○ぽ、優しくシコシコしてあげるね★」

「お、おふう！ その台詞だけでもうっ——」

無邪気にそう言っただけのけるありすに、流石はエロゲヒロインだと改めて思い知らされる。

いや、俺もエロゲはほとんどやらないけど、いわゆるテンプレ的なのはネット等でよく見かけるから…

そういう意味では、彼女はまさにテンプレ通りのエロゲヒロインだった。

「さあ、お兄ちゃん。今楽にしてあげるから…♪」

「だ、だからダメだって—— ひゃっほう！」

俺の下半身にピッタリと寄り添いながら、ゆっくりと手コキを始めるあります。彼女の小さくてしっとりとした手が、絶妙な力加減で俺のペニスを包み込み：まるで楽器を奏でるように、軽やかに表面を撫でつつ竿の部分を前後する。

「あはっ♪　すごいピクピクしてるう：　おち○ぽって動物さんみたいで、可愛い」

「ふおおお：！　こ、こりやタマランっ」

「よしよし、ありす怖くないよー？　ここかな？　ここが気持ちいいの？」

「ぬおっ？　そこ、裏筋い！」

その手加減のない快感に、俺は激しく打ち震える。

自分で扱くのは全く違う次元の気持ち良さに、俺は硬直して動けなくなった。まあ元より、ありすに対して一切の抵抗を放棄してるわけだが：

「お兄ちゃんのおち○ぽ、すごい固いね。　なでなで、さわさわっと」

「ま、待った待ったっ。　それやべえ、すげえむず痒くて：！」

「えっ、痒いの？　じゃあ掻いた方がいい？　ぽりぽりって」

「あううん！　そんな、急に爪立てたらあっ？」

爪の固く尖った感触が食い込んで、電気が走ったような刺激に悶絶する俺。完全に油断してたものだから、思わず腰が引けそうになる。

「ごめんね、痛かった？ 搔いた方が気持ちいいかと思って…」

「い、いや、大丈夫…けど爪立てるのは勘弁してくれ」

「わかったあ。なるべく優しくするからねっ」

ありすはフランスと鼻息荒く意気込むと、再びしなやかな指使いでペニスをシゴいてくる。そこからもたらされる甘く、痺れるような快感に、俺はもう口で制止することすら出来なくなってしまう。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん…★ ありすの手でいっぱい気持ち良くなってねえ」

「ううつ、はあ、はあ…あ、ありすう…！」

「おち○ぽ、太くて遅しくてえ… 何だかありすもドキドキしてきちゃうよお」

ありすは甘えるように身体を摺り寄せながら、手コキを続ける。

更にさつきから彼女の巨乳が、俺の太ももやペニスの裏側に、ムニムニと押し当てられ…

その圧倒的なポリウムと弾力の片鱗を感じて、イチモツが根元から暴れ出しそうだった。

「わっ、なんかぬるぬるしたのが出てきたあ」

そんなありすによる二重三重の快感に、あっという間にガマン汁があふれ出してくる。

犬のヨダレみたいにならなく垂れるその透明な粘液に、俺は自分の節操のなさを思い知らされた。

「お兄ちゃん、ぬるぬるが出てきたよ？　ありすの手、気持ちいいの？」

「あ、ああ、気持ちイイよ……！」

「えへへっ、お兄ちゃんに喜んでもらえて嬉しい♪」

彼女の問いについて正直に答えてしまい、ありすは嬉しそうに微笑んだ。

俺のち○こを携えたまま笑うその様が、また凄まじくエロい……！　これがエロゲヒロインの魅力かつ。

「じゃあありす頑張って、もっともーっと気持ち良くしてあげるからねっ」

「もう、好きにしてくれ……ハアフウ」

「うん、ありすにお任せだよつ。すりすり、シコシコ、キュツキュと」
「ぐあぁーっ？　ね、根元を締めてえ！」

右手で緩やかに竿を撫で回しながら、左手でペニスの根元をキュツと握り締めるありす。
その包まれるような刺激と圧迫感のデュエットに、先端の亀頭がカウパーを撒き散らしながら
首を振るう。

「ほらほら、こうするとおち○ぽビクンビクンって！　元氣いっぱいになってすごいよお」
「ふおおっ、おっおお…！　おうおう」

「これ、気持ちいいんだよね？　お兄ちゃんの顔見ればわかるよ…えい、えいっ★」

ありすの手コキはとどまることを知らず、より激しさを増していく。

竿を前後する右手も緩急をつけて力を入れるようになり、次第に容赦のない快感を与えてきた。

「あ、ありすう…！　それ、すげえっ——マジでやばいっ」

「やばいの？　もしかして、また痛い？」

「違うっ、もう気持ちよ過ぎるんだあ…！」

「そっか、良かったあ…おち○ぽってすごく敏感なんだね。　　ありす、段々コツがわかってき

た力モっ」

誇らしげにそう語りながら、ありすはシコシコと絶え間なく手を動かし続ける。その強烈な快感を前にして、俺はもう完全に抵抗する気がなくなってしまった。

全面降伏、完全屈服――

俺は今日出会ったばかりのこの少女の手つきに、あっという間に虜にされていたのだ。

「お兄ちゃんて、おち○ぽだけじゃなくて体もおっきいね。　さすがはお兄ちゃんだあ」

「あっあっ、そんな身体ごと擦り付けてきたら……！」

「こうしてお兄ちゃんにくっついてると、安心して、でもドキドキして……変な感じになってるの」

「はああ、お兄ちゃあん……　ありす、お兄ちゃんを好きって気持ちがどんどん溢れてくるよお」
「うああっ、そんな、ち○こに頬擦りまでえ？」

ありすは全身を擦り付けてきて、おまけにペニスに頬を当ててスリスリしてくる。

それはまるで手コキだけでなく、ありすの全身で俺の下半身をシゴいているかのようだ。

「んんっ、おち○ぽ熱うい… ドクドクいつてるのが、伝わってくるよ？」

「ハアハア、あ、ありす…それ以上は、もう！」

「…お兄ちゃんのおち○ぽって、どんな味がするのかな？」

「甘い？ それともしよっぱいかな？」

「！ ありす、お前まさかっ——」

「んんん…れろんっ」

「おっほお！ な、舐めてえっ？」

ありすは小さく可愛い舌をちろりと出すと、一切の躊躇なくペニスを舐めてきた！
少しざらつとした舌の感触が裏筋を伝い、寒気のような快感がペニスから背筋にまで走るっ。

「あはっ なんか変な味がするね… しよっぱいような、ちよつと苦いような？」

「うはあ、今、ぬるっとして生温かいのがあ…！」

「でも、嫌な味じゃないよ？ なんかクセになりそう… んんっ、れろお——」

「ぬおおっ？ 舌あ、絡まってくるう！」

ありすの舌が、裏筋を中心に亀頭から竿までを往復した。

最初は恐る恐る、それこそ味を確かめるように。
そこから次第に大胆な舌遣いへと移行する。

「ふわあ、やつぱり固くて熱うい… れろれろ、ぺろぺろ、むちゅう」

「はあはあ、フウフウ…舌が、舌がやべえよおっ」

「ちろちろ、レロレロ、んちゅんちゅ、はむう—— ふふっ、お兄ちゃんなんだか可愛い」

アイスでも舐めるみたいにペロペロ舌を這わせながら、無邪気に微笑むあります。
その拙いながらも懸命な舌遣いに、俺は理性がガリガリと削られていくのを感じた。

「んっんっ、ちゅくちゅく、ちゅぱちゅぱちゅぱ… お兄ちゃん、コレも気持ちいいんだあ？」

「あ、ああ…はつきり言って、ムチャクチャ気持ちイイ」

「えへへ…あります、何だか犬さんになったみたいな感じ。 大好きな人にペロペロするの——
ちゅるり、ちゅくちゅくっ」

「ほああっ、そ、それ…！」

「んふっ、おにいひゃあん… れろれろ、ちゅっちゅ、ちゅぱちゅぱ、じゅるるるっ」

ガマン汁とありすの唾液でびちよびちよになったペニスが、

部屋の明かりに煌煌と照らされる――

それはどこか現実感のない、ひどくエロティックな光景だった。

「ちゅぷちゅぷ、くちゅくちゅ、はふはふ、はむう……」

「あ、ありす、それ以上はホントもう……！」

「お兄ちゃん、気持ちイイんでしょ？」

「だったらもつとやってあげる――ぺろぺろ、むちゅう」

「うああっ、あっあっ――！ やばい、やばいやバイやばいってえっ」

俺を気持ち良くしようと、それこそ人懐こい犬のように、怒張したペニスを丁寧に嘗め回すありす……

その姿に触発され、俺の中で凶暴な感情が鎌首をもたげる。

それは自分でも信じられないくらい、激しく暴力的な衝動だった。

「ありす、ごめん！」

「ふえっ？」

頭の中で、プツンと理性の糸が切れるのがわかった。

そして俺はありすの頭を掴むと、そのまま彼女の小さな唇の中へ亀頭をねじ込む！

「む、むぐうつ!？」

「うはあ！ む、むちやくちや気持ちイイっ」

ありすの口の中は温かく湿っていて、舌がクッションのように俺のペニスを受け止めていた。その感触はここまでされるがままだった俺に、男の本能を呼び覚まさせ――

「んごっ、むぐむぐ…んぶう！」

「あぁっ、何だコレ！ 頭ん中が真っ白になってえっ」

「んちゅっ、じゅぷじゅぷっ、もごもご、おぶうつ」

ペニスを無理やり咥えさせられ、ありすは驚いて軽くえづく。

しかし俺は構わず腰を動かして、ありすの口内に出し入れを繰り返した。

「はふっ、んぐんぐ、じゅるじゅる、んんんんんっ！」

「ごめん、ごめんよっ。でも止められないんだ！」

「むちゅうつ、じゅっぷじゅっぷ、もごもご、んぐう…！」

口では謝りながらも、ありすの口を犯し続ける俺。

両手で頭を固定し、ガンガン腰を突き出すと、ペニスに舌の絡まる感触がたまらなく気持ちいい――

「はあはあっ、いいぞ、いいぞありす！ お前の口の中は最高だあっ」

「んちゅう、むちゅむちゅ、じゅぽっじゅぽっ、もごおっ」

その乱暴な行為に、ありすは苦しそうにしながらも、俺の下半身にギュツとしがみ付いて耐えている。

こんな無理矢理されてるのに、俺を見上げる目にこちらを責める様子は一切なかった。

「んぐんぐ、じゅるじゅるっ、はふう―― れろれろ、ちゅっちゅっ、ちゅくちゅく、ちゅるるるっ」

「あ、ありす、お前え…!?!」

それどころか、なおも俺に奉仕しようと、口をすぼめて懸命に舌を這わせようとするありす。そっちから始めてきたこととはいえ、こんなことされて苦しいだろうに…

その健気さに胸を打たれつつも、結果として更に俺の腰を加速させることになるのだった。

「んぶう、むぐむぐ、ちゅくちゅく、ちゅうちゅう、じゅるるる、じゅぶう！」

「ああおっ、おっおおう！　ありす、ありすうっ」

「もごお、じゅぶじゅぶ、ちゅるちゅる、れろれろ、んくんく——！」

俺は異様な興奮状態に陥りながら、ガンガン腰を振ってありすの口の中を蹂躪する。

酷いことをしているという自覚はあるのに、凶暴な衝動がそれを止めさせない——

俺はどちらかというと穏やかな人間だと思ってたのに、こんな真似が出来るのかと自分でも驚いていた。

「はあああ、フウフウ、い、イクッ、そろそろイクぞ！」

「んぶう！？　おごお、もごもごっ、んんんんんっ」

やがて射精が近いのを感じた俺は、亀頭の先端を喉の奥にまでぐいっとねじ込んだ。喉全体がペニスを締め付けてくる感触に、背筋からゾクゾクとした快感が伝って——

「うああ、出るウ！　このまま喉の奥に出すぞ、ありすっ」

「おおお、んちゅんちゅ、んんーっ、んううううう！」

ありすは苦しそうに何度もえづくが、俺は頭を固定したまま離さない。
そしてこみ上げる衝動をそのままに、ありすの喉奥でそれを解き放った。

「んううーっっっ？ おごっ、んんんっ、んぐんぐっ」

断続的に吐き出される精が、次々とありすの喉へと注ぎ込まれていく。

我ながらビクリするくらいの量が出てるのがわかって、俺はすさまじい放出感に酔い痴れた。

「んんっ、んく、んく…こく、こく、んちゅ、んちゅう」

「おお、飲んでる…！ 俺の出した精液、飲んでるよおっ」

苦しそうにしながらも、何とかそれを飲み干そうと喉を鳴らすありす。

しかし俺が出す精液の量は、彼女が飲み下す量を完全に上回っていた。

「っ？ ごぽっ、ケホケホ、ごほごほ、おおお！」

やがてありすは激しく咳き込んで、精液が逆流して口の端から溢れてくる。

（ダメだ、これ以上は流石に…！）

それを見た俺はなけなしの理性を振り絞って、ありすの口からペニスを引き抜いた。

「んはああ——こはっ、カハコホッ、けほけほけほっ！」

「うああ、まだ出てるう。クソッ、こんな——！」

引き抜いたは良かったが、まだ絶賛射精中だったので、鈴割れからは精液が勢いよく噴き出して撒き散らされる。

それがありすの口だけでなく、顔や手、胸までを白く汚していった。

「ハアハア、フウフウ、ううう… こ、こんなに出したのは初めてじゃないか…？」

「かはっ、ケホケホ、フウフウ、ひゅーひゅー…」

射精の余韻に浸って、今にも腰砕けになりそうな俺。

これほどの快感は今まで経験したことがなかった。

大量の精液がありすに降り注ぐのを見下ろしながら、俺は徐々に冷静さを取り戻していく。

「えほつ、コホコホツ、あうう、うふふつ——はあふう」

「！　だ、大丈夫か？」

そして咳き込みながら荒い息をつくありすの姿に、ようやく我に返って声をかけた。

「あうう…急におち○ぽ押し込まれて、ビックリしたよお」

「本当にゴメンっ。キミに舐められてたら、あまりの気持ち良さについて我を忘れて…！」

謝って許されることじゃないが、とりあえず謝ることしか出来ない俺。

しかしそれに対しありすは怒るでもなく、無垢な瞳のままこちらを見上げた。

「お兄ちゃん…ありすにペロペロされて、そんなに気持ち良かったの？」

「あ、ああ。すごかったよ…」

そう訊かれて、無意識のうちにありすの頭を撫でる。

するとありすは気持ち良さそうに目を細め、ふにやりと表情を崩した。

「それならいいよお。 お兄ちゃんが気持ち良くなってくれて、ありす嬉しい」

「ありす…」

「えへへっ。 ありす、上手にできたかな？」

手コキからフェラ、イラマチオまでこなして、精液まみれになりながらも無邪気に笑うありす。そんな彼女の様子に、ありすが本当にエロゲのヒロンなのだと俺は実感するのだった。

（兄Ⅱプレイヤーである俺に対するこの献身さは、現実の妹じゃまずあり得ないよな…）

しかしそれが必要以上に劣情を煽って、俺もすっかり暴走してしまったわけだが。

「んふっ、おち○ぼみるくいっばい出たね…♪ クンクン」

「あ、コラ！ そんなの匂い嗅ぐんじゃないっ」

「どうしてえ？ 甘い匂いがして、ありす好きなのに… 味は苦いけど」

ありすは顔に付いた精液を指で搦い、クンクンと匂いを嗅いでみせた。

まあ精液特有の栗の花のような臭いは、癖になるといえば癖になるけど。

「くんくん、クンクンクン—— ふあ、あつ、はああつ……」

そこでしきりに鼻を鳴らしていたありますが、不意に鼻をムズムズさせる。
ん？ このタイミングでクシャミって、まさか……

「ちよ、そのクシャミ待っ——」

「——はっくちんっ」

慌てて制止しようとするが、時既に遅し。
ありすそのままは可愛くクシャミした。

「……………？ あ、あれ？」

その結果、またも俺の目の前でありすから亜里紗に入れ替わる。
それで今更になって気付いたのだが、入れ替わる際は肉体だけでなく服も一緒に変わるらしい。

「私、何やって——んんっ？」

入れ替わった直後の亜里紗は、状況が理解できずにしばしぼんやりとしていたが…

「ひやつ、な、な、何コレエ！」

やがて自分が俺のペニスを握って、おまけに精液まみれであることに気付いたようだ。そして、わかったことがもう一つ——服は変わっても、身体に付着した精液までは変わらないらしかった。

「キャー！ッ!? お兄い、私に何したの？ 変態、シスコン！」

「ご、誤解だ！ これには色々事情があつて…」

自分の惨状に悲鳴を上げる亜里紗に、俺は慌てて弁解しようとするが…

（…だ、ダメだ！ 上手く説明できる気が全くしないっ）」

少なくとも下半身丸出しの今の状態では、何を言っても説得力がなかった。

「ついに妹に顔射までして…！ このレイプ魔っ、レイプ兄い！」

「だから、違うんだって！ あとレイプ兄いとか言うなよ、妙にゴロがいいからっ」

「知らないっ。うわあ、服にまで白いのかかってるう…」

「あのな？ それはその、決してお前にぶっかけようとしたわけじゃなくて——」

「じゃあどこに出すつもりだったのよ？ ま、まさか私のナカに…！」

「違う、誤解だあ！」

「もういい、私お風呂入ってくるから！」

亜里紗は当然のように聞く耳を持たず、リビングを飛び出していった。

ま、ほぼ全身ザーメンまみれだもんな…

あれじゃ風呂で洗い落とすしかないだろう。

「っーか俺、口の中にも出しちゃったんだけど… それには気付かなかったのか？」

顔や服よりも真っ先にそこに気付きそうなものだが、亜里紗はその点には何も触れなかった。とっさに『顔射』とか言ってたし、それってつまり口の中には精液がなかったってことか？

（顔や服に付いた精液はそのままだったのに： 一体どういうことだ？）

亜里紗とありすの入れ替わりについては、まだまだわからないことだらけだった。

「いや、それよりもこの状況：どーするんだよ？」

亜里紗に誤解されたこともそうだが、

ありすの存在と、クシヤミで二人が入れ替わるあの現象――

これは今後の俺と亜里紗の日常生活を大きく揺るがす、重要な問題だった。

W妹ヴィジョナリー紙の体験版 二ノ宮 ありす 編

2015年2月4日発行

著 作：コットンソフト

公式サイト：<http://cotton-soft.com/>

無断複写・複製・転載を禁じます。

W妹 ダブイモ ヴァンショナリー

DABUIMO VISIONARY

2015年2月13日発売

ジャンル:二人の妹が二心同体ADV

原画:大泉だいさく / 麻の葉、シナリオ:海富一

動作環境

対応OS:Windows Vista / 7 / 8、必須CPU:Pentium 4 2GHz以上

推奨CPU:CoreDuo 2Ghz以上、DirectX:DirectX 9.0c以上、音源:Wave音源

【限定版】4,480円(税込)、【通常版】3,980円(税込)

※「限定版」には『おまけシナリオ』『設定資料集』『特典楽曲』が付いてきます。

詳しくは、

<http://gyutto.com/spgame20141204.html>